

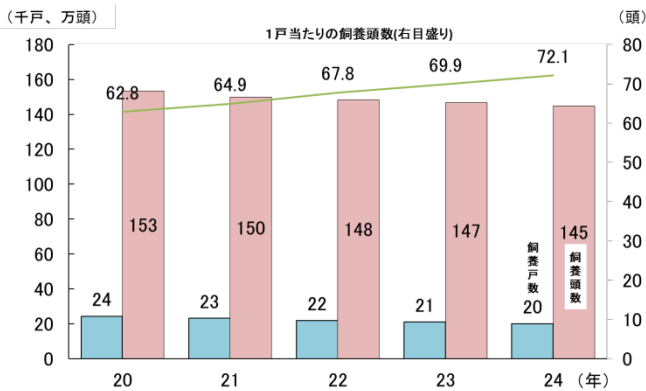


牛乳・乳製品

◆飼養動向

24年2月現在の乳用牛飼養頭数、1.2%減少

図1 乳用牛の飼養戸数、頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、24年は概数値。

乳用牛の飼養頭数は、5年以降、減少傾向で推移しており、24年2月には145万頭(▲1.2%)と前年をわずかに下回った。

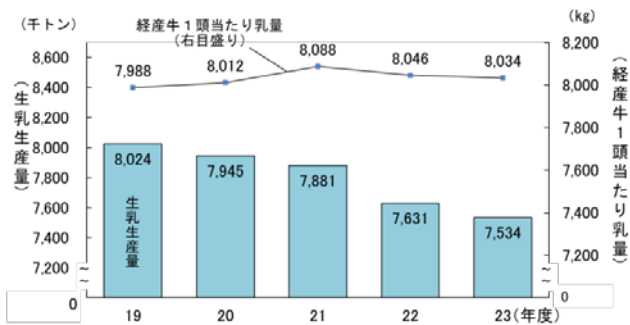
飼養戸数は、飼養者の高齢化による廃業に加え、配合飼料価格の上昇による収益性の低下、さらには東日本大震災等の影響などを受け、24年には前年を900戸下回る2万100戸(▲4.3%)となった。

こうした結果、24年の1戸当たりの飼養頭数は、やや上回る72.1頭(3.2%)となった(図1)。

◆生乳生産量

23年度の生乳生産量、1.3%減少

図2 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量(全国)



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」及び「牛乳乳製品統計」

注：23年度の生乳生産量、経産牛1頭当たり乳量は概数値。

生乳生産量は、8年度に約870万トンとピークとなり、その後都府県における減少により、低下傾向で推移してきた。

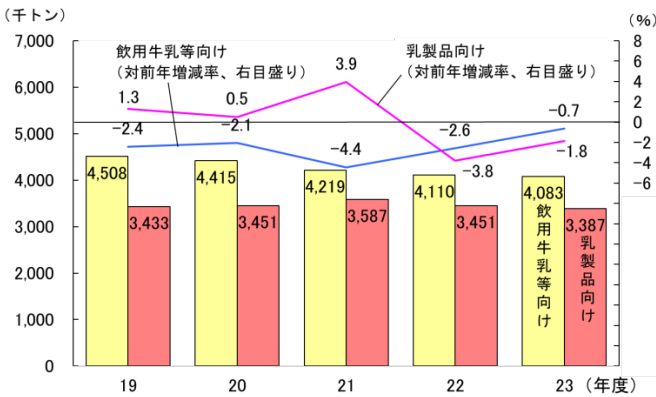
22年度は、夏場の猛暑などの影響で全国的に生産量が減少したことで、前年度比3.2%減となった。この傾向は23年度も継続し、11月以降は前年同月を上回るようになったものの、年度計では753万4000トン(▲1.3%)となり、4年連続で800万トンを下回った。

一方、経産牛1頭当たりの乳量は、22年度に減少に転じ、23年度は8,034キログラム(▲1.5%)となった(図2)。

牛乳等向け処理量

23年度の飲用牛乳等向け処理量、0.7%減と9年連続の減少

図3 用途別処理量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：23年度は概数値。

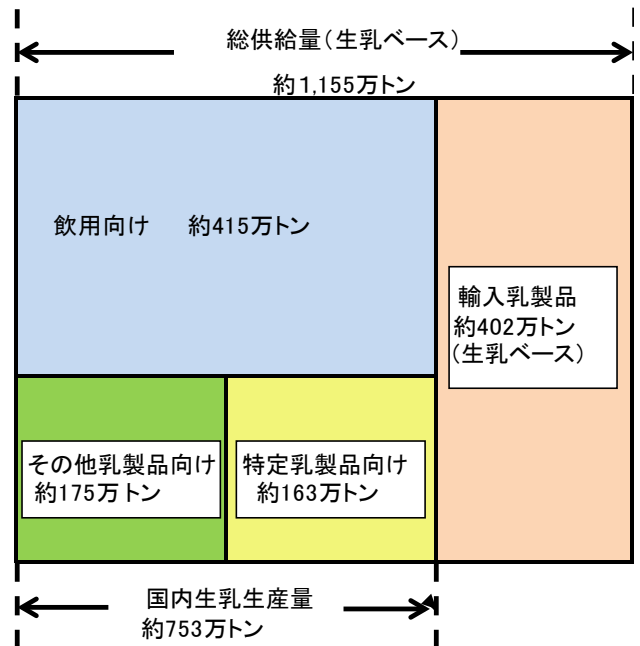
飲用牛乳等向け処理量は、その消費動向を反映して推移しているが、その他飲料との競合などから消費が伸びず、6年度をピークにおおむね減少傾向で推移している。

20～21年は、成分調整牛乳の需要が一時的に急拡大したものの、飲用牛乳全体での生産量は前年度を下回り続けた。23年度は東日本大震災による電力不足を受け、牛乳の生産量は前年度を上回ったものの、加工乳・成分調整牛乳が減産したことにより、飲用牛乳等向け処理量は408万トン（▲0.7%）と、9年連続の減少となった（図3）。

乳製品向け処理量

23年度の乳製品向け処理量、1.8%減

図4 生乳の需給構造の概要(23年度)



資料：農林水産省生産局「畜産・酪農をめぐる情勢」
注：四捨五入の関係で、必ずしも計が一致しないことがある。

牛乳等向け処理量が減少する中、21年度までは乳製品向け処理量はおおむね前年度を上回る傾向にあった。しかし、生乳生産量の減少に伴い、22年度は345万トン（▲3.8%）と4年ぶりに前年度割れとなり、23年度も339万トン（▲1.8%）と引き続き前年度を下回った。

一方、生クリーム等向け処理量は、堅調な需要を反映して125万トン（7.3%）と2年連続の増加となった。

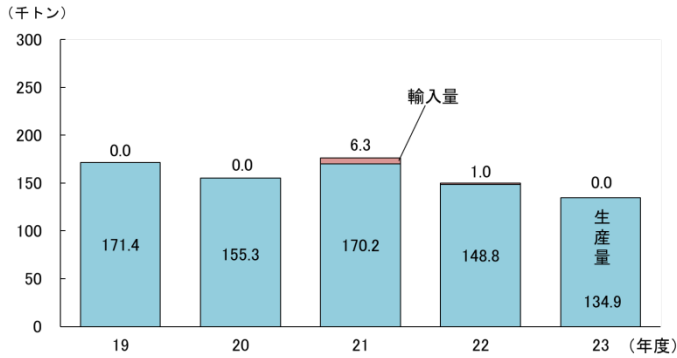
こうした結果、23年度の総供給量は、国内生乳生産が753万トン、輸入乳製品（生乳ベース）が402万トン、国内生産量のうち、飲用向けが55.1%、乳製品向けが44.9%となった（図4）。

◆乳製品

脱脂粉乳

23年度の推定期末在庫量は前年度末より18.9%減少、大口需要者価格は上昇

図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：輸入量は機構輸入分のみ。なお、23年度は概数値

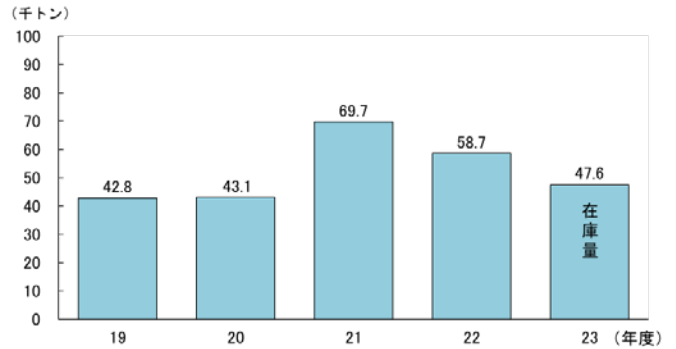
脱脂粉乳の生産量は、近年、フレッシュな脱脂濃縮乳に需要が置き換わりつつあることなどを背景に減少傾向で推移している。これに生乳生産量の減少などの要因が加わり、22年度から2年連続で前年度を下回った。

22年度は猛暑などによる生乳生産量の減少のため、14万9000トン(▲12.6%)とかなり大きく下回り、23年度も同様の傾向が続き13万5000トン(▲9.3%)となった(図5)。

一方、推定期末在庫量は、21年度は需給の緩和から積み増しが進み、7万トン(61.7%)と大幅な増加となったが、その後は生産量の減少などの影響を受け、23年度末の時点では4万8000トン(▲18.9%)となった(図6)。

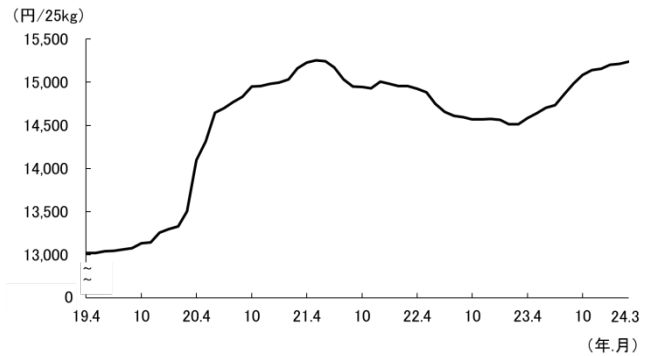
23年度の推定出回り量を見ると、価格上昇による需要の減少や、脱脂濃縮乳への置き換えなどの影響を受け、14万6000トン(▲9.2%)とかなり減少した。なお、カレントアクセス分の輸入は行われなかった。

図6 脱脂粉乳の推定期末在庫量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：23年度は概数値

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格



資料：農林水産省生産局調べ。
注：消費税を含む。

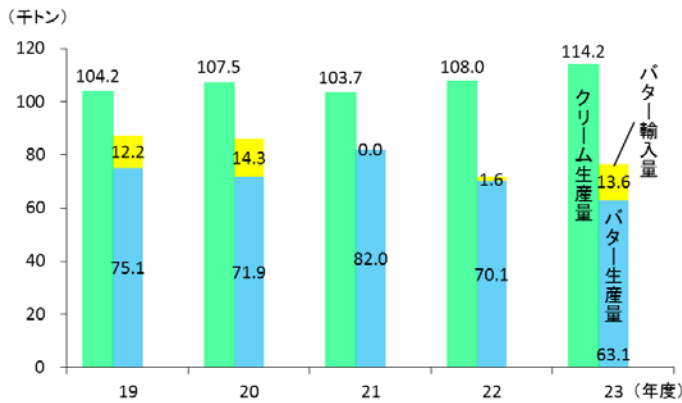
脱脂粉乳の大口需要者価格は、20年度に乳製品の国際需給がひっ迫したことから高水準で推移した。

21年度と22年度は国内の在庫量が高い水準にあったことから、価格も一旦は下落傾向にあったが、23年度に入ると上昇傾向に転じ、23年度は25キログラム当たり1万4962円(2.2%)となった(図7)。

バター・クリーム

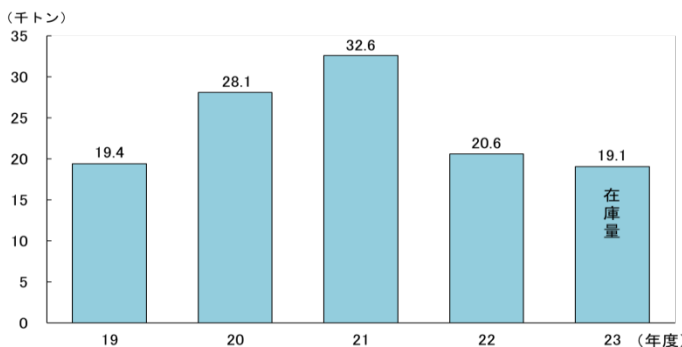
23年度の推定期末在庫量は前年度末より7.4%減少、大口需要者価格は前年を上回る

図8 バター、クリームの生産量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：23年度は概数値。

図9 バターの推定期末在庫量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ
注：20年以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

バターの生産量は、22年度は、夏の猛暑の影響とチーズ・クリーム向け処理量が増加したことから、7万トン(▲14.5%)と大きく減少した。23年度は、東日本大震災の影響も重なり、生乳不足となった結果、6万3000トン(▲10.1%)とかなり減少した。

クリームの生産量は、業務用向けの需要が好調なことを受け、堅調に推移しており、22年度は、コンビニ向けデザート類などの需要拡大を背景に10万8000トン(4.1%)

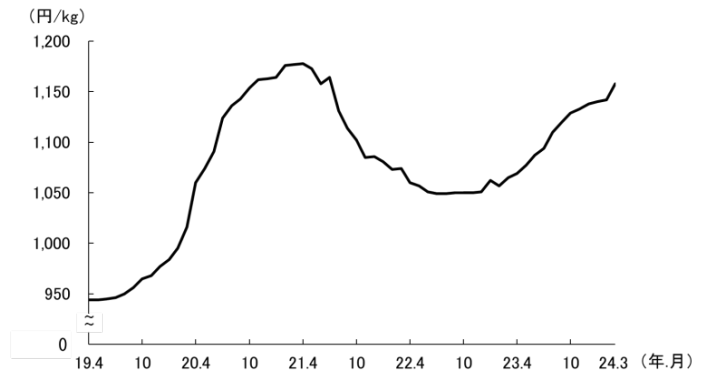
と前年度をやや上回り、23年度も11万4000トン(5.8%)と引き続き前年度を上回った(図8)。

バターの22年度推定期末在庫量は、生産量の減少などを反映し、前年度を1万2000トン下回る2万1000トンとなった。23年度は、引き続き生産量が前年度を下回ったことから、在庫量はさらに減少し1万9000トン(▲7.4%)となった(図9)。

なお、23年度のカレントアクセス分の輸入量の実績は1万1578トンであった。

また、バター生産が伸びない中、在庫水準を勘案し、年末の最需要期に安定的な供給を確保するため、3年ぶりに2,000トンの追加輸入を実施した。

図10 バターの大口需要者価格



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ。
注：消費税を含む。

バターの大口需要者価格は、21年度に生産量、在庫量ともに増加したことを反映し、低下傾向で推移しキログラム当たり1,118円(▲1.5%)と3年ぶりに前年割れに転じた。22年度も、ほぼ横ばいで推移したものの年度平均では同1,054円(▲5.7%)と2年連続で前年割れとなった。

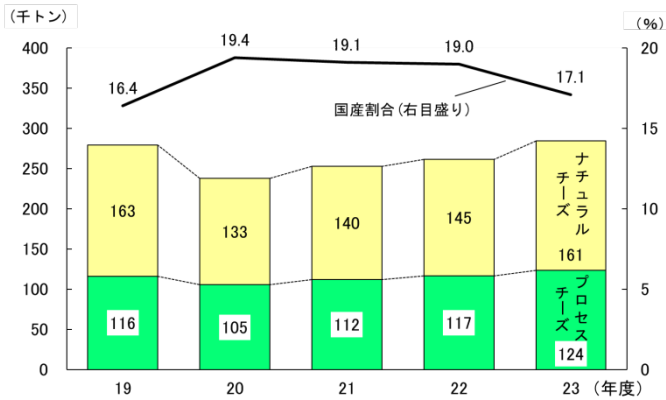
23年度は生産量が伸びず、在庫量が低い水準となったこともあり、1年を通し価格は右肩上がりで上昇し続け、年度平均も同1,116円(5.9%)となった。(図10)

◆チーズ

23年度の総消費量、8.8%増加

チーズの総消費量と国産割合

図 11 チーズの総消費量と国産割合



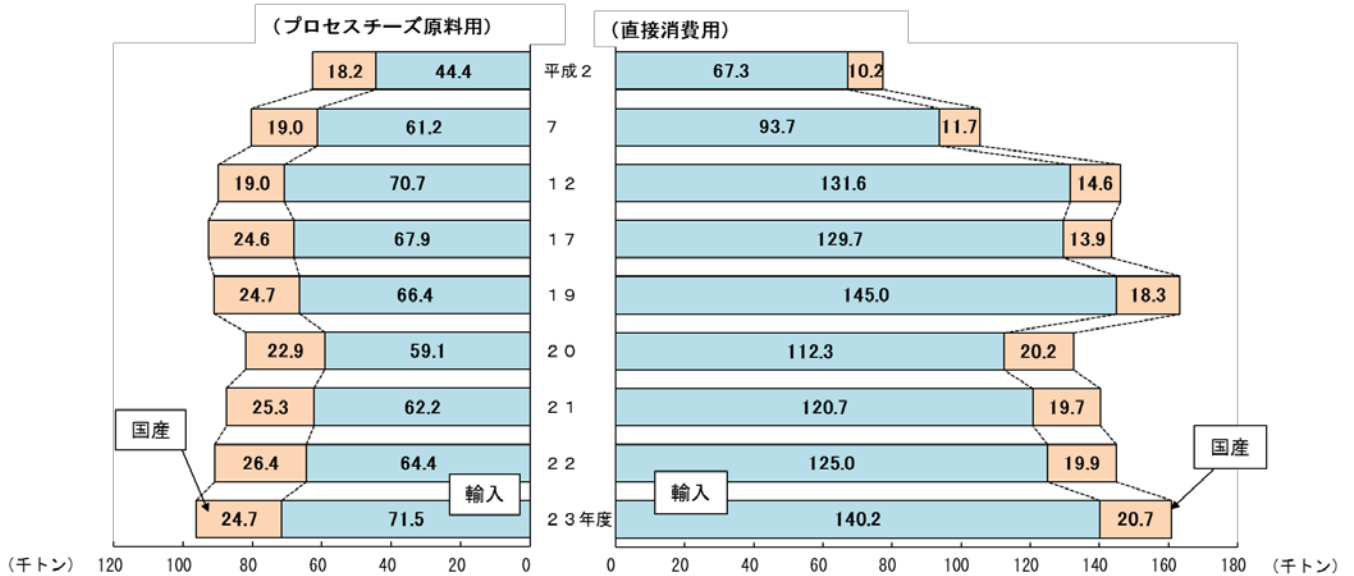
資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課「チーズの需給表」

20年度の国際価格高騰や、世界的な経済不況により家庭用や外食用の消費が冷え込んだことから、チーズの総消費量は一時的に落ち込んだものの、21年度以降は、国際価格が下落し輸入量が増加したことや、製品価格の値下げと内食化の進展もあり需要は回復傾向にある。

総消費量は21年度に前年度比6.2%増、22年度に3.5%増と堅調な伸びを見せた。さらに23年度は、引き続き堅調な需要を反映し、ナチュラルチーズ消費量が11.0%増、プロセスチーズ消費量も6.0%増となり、合計28万4000トン(8.8%)で過去最高となった。(図11)。

ナチュラルチーズの生産量・輸入量

図 12 ナチュラルチーズの生産量・輸入量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課「チーズの需給表」

ナチュラルチーズの輸入量(直接消費用+プロセスチーズ原料用)は、3年連続で増加しており、23年度は21万1700トン(11.7%)となった。このうち直接消費用は14万200トン(12.1%)、プロセスチーズ原料用は7万1500トン(11.0%)と、いずれもかなり上回って推移した(図12)。

国産ナチュラルチーズの生産量(直接消費用+プロセスチーズ原料用)は、需要の拡大を背景に17年度から22年度まで6年連続で前年度を上回って推移した。23年度も4万

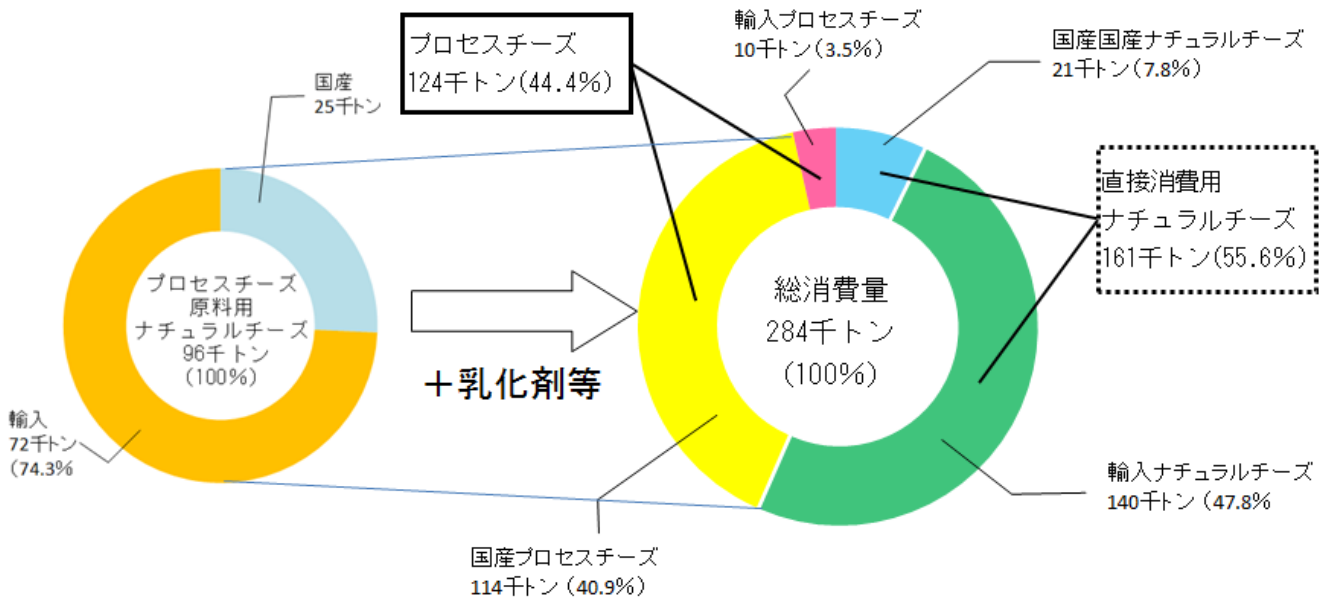
5400トン(▲1.8%)と、わずかに前年を下回ったものの、長期的には依然堅調である。

このうち直接消費用は2万700トン(4.1%)で過去最高となったが、プロセスチーズ原料用は2万4700トン(▲6.2%)とかなり減少した。

結果として、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズにおける国産の割合が、22年度の29.1%から23年度は25.7%へと小さくなった。

チーズ消費量

図13 23年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

注：直接消費用ナチュラルチーズとは、プロセスチーズ原料用以外のものを指し業務用その他原料用を含む。以下のグラフについても同様。

国内におけるチーズ消費量は、20年度に世界的な景気失速の影響を受け、家庭用や外食用が一時的に落ち込んだ後、21年度以降は再び前年度を上回って推移している。

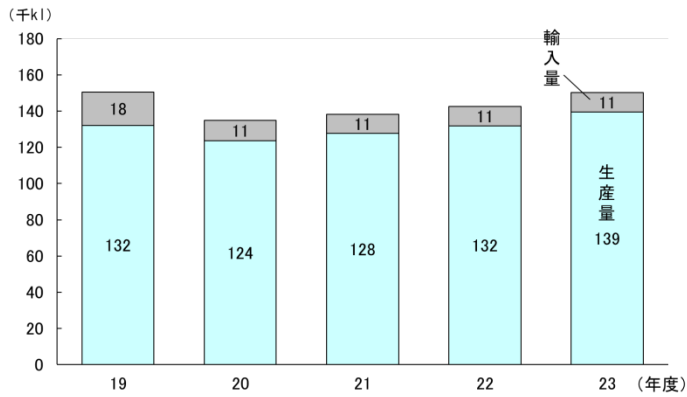
23年度のチーズ総消費量における国産チーズの割合は、生乳需給がひっ迫基調で推移したことを反映し、17.1%と前

年度より1.9ポイント低下した。また、プロセスチーズ原料用に占める国産の割合は25.7%と3.4ポイント下落した。

◆アイスクリーム

23年度の生産量、5.7%増加

図 14 アイスクリームの生産量と輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」

注：輸入量は、1t=1.455klで換算。なお、23年度は概数値

アイスクリームは、近年、豊富な品揃えにより、女性を中心に購買頻度が高まっている。23年度の生産量は、13万9000キロリットル(5.7%)と4年連続で前年度を上回った。

輸入量は、輸入価格の上昇を背景に17年度以降減少傾向で推移しており、22年度の7,300キロリットル(▲0.2%)まで6年連続で減少した。23年度は7,400キロリットル(1.4%)とわずかに回復している(図14)。